

第 104 回山口西田讀書會

2016 年 3 月 12 日（土）1 時 30 分より 3 時 45 分

第 103 回（3 月 5 日）のプロトコル

参加者：福田、谷、千葉、深野、岡田、桑原、田中、山口、佐野（計 9 人）

1. 第 103 回（3 月 5 日）の哲学的問い：「宇宙が合目的だというのは本当だろうか。美術家のような目を養えばそれが見えるというのが西田の主張であるが、絵画にもいろいろありそうだ。ムンクの「叫び」などどうだろうか。宇宙は無意味な偶然の繰り返しに過ぎないとは考えられないか。この二つの見方をどのように総合的に考えたらいいのだろう。」について。

この問いそのものについての議論を深めることはできなかった。むしろこの問いの立て方自体に疑問が提示された。この問いにおける後半の考え方はニヒリズムであるが、西田先生のテキストにこのような主張は見られない、というのである。以下は質問者（＝筆者）の感想である。『善の研究』、とりわけ第 3 篇にはニヒリズム的主張が見られない、ということは事実である。しかしながら実はそれ以前に西田先生は『倫理学草案第二』を執筆しており、その中で明確にニヒリズム的主張を思索の根本においている。『善の研究』はそれを踏まえての叙述である、というのが筆者の現時点での解釈である。そもそもニヒリズムというのは徹底した自己批判である。我々はどうしても安心を求める。そうして自分にとって都合のよい世界観を受け入れる傾向がある。世界の中の全てにそれ自体として絶対的な意味があるとする世界観も、そうあって欲しいという我々の願いに基づいた都合のよい世界観かも知れない。「宇宙は無意味な偶然の繰り返しに過ぎない」というニヒリズムはこうした我々の抱きやすい都合のよい世界観を打ち砕くものであって、このニヒリズムの批判に耐えられない如何なる信仰も自己批判を欠いた妄信になるのではないか。このニヒリズムを謬見だとして単純に退けないやり方というのはないのだろうか。

2. テキスト講読：第 3 篇第 3 章「意志の自由」第 1～5 段落

この章では「意志がいかなる意味で自由の活動であるか」が論じられる（第 1 段落）。第 2 段落では自分の意志が「或る範囲において自由である」、すなわち「なすこともできればなさぬこともできる」という「普通に信ずるところ」から出発する。この「或る範囲」が次に次第に限定されていくことになる。「外界の事物」、「自己の身体」、「自己の意識現象」というように狭められ、ついに「ただ観念成立の先在的法則の範囲内において、しかも観念結合意に二つ以上の途があり、これ等の結合の強度が強迫ならざる場合においてのみ、ぜんぜん選択の自由を有するのである」と「選択意志の自由」が抽出され、第 3 段落においてそれは「外界の事情または内界の気質、習慣、性格より独立せる意志」と定義される。これに対し「意志の必然論」は「我々の意志は全ての自然現象と同じく、必然なる機械的因果の法則に支配せられるもので、別に意志という一種の神秘力はない」と主張する。

第4段落では自由意志論に対する西田の反論が繰り広げられる。我々が動機を決するとき（動機に基づいて意志を決定する場合には）意識の有無にかかわらず、「相当の理由」がなければならない、さもなければ偶然に決したということで意志の自由を感じない、というのである。続く第5段落では必然論に対する反論がなされている。批判の骨子は機械的必然の法則を意識現象に適用することはできない、というものである。この段落における「意識現象と自然現象とは同一であって、同一の法則によって支配せられるべきものである」という仮定に対する否定的な主張と、第2章第4段落の直接経験（純粋経験）の立場、すなわち自然現象と精神現象を同一とみる主張の間には矛盾があるように見えるがこれをどう解釈するかについて意見が分かれた。この点については次回に持ち越されることになった。

哲学的問：

「この場はそういう場ではありません」という主張がありました。今回の哲学的問いはそれに因んで。それでは「この場」とはどのような場なのでしょう。何のために我々はこちらに集まっているのでしょうか。色々な思いがあって集まっている、それでいい、という考えもあるかもしれません。しかし「この場がどういう場であるか、我々は何のためにここに集まっているのか」という問いを忘れた如何なる「読書会」もその存在意義はないと思います。色々な思いがあっていいというのと、問いを忘れたということとは根本的に異なると思います。この問いを忘れた会はただの雑談の場となり果てるでしょう。この会が始まって100回を超えました。その中で見えてきたことはこの会をどのように考えているのか、どのようなものにしたいのか、そのような本質的な問いが共通の問いとして欠如しているということです。

この場はもちろん「読書会」です。しかし「書を読む」とはどういうことでしょうか。テキストを読む場合に一般的に陥りやすいのは、テキストに対して賛成反対のみを問題にし、書かれたことを自説を固めるために利用するあり方です。このようなあり方において一番の関心の的は「自説」です。こうしたあり方が保持されている限り、「自説」から一歩も出ることはできません。これが「読書」ということなのでしょう。

そこで今回の哲学的問いは我々にとって最も根本的な問い、すなわち「この場はどのような場であるか、我々は何のためにここに集まっているのか」、にしたいと思いますが、まずはそれが仮に「テキストを読むため」だとして、「テキストを読む」とはどういうことか、それを考えたいと思います。自説に都合のよいところだけ頷いて自説を固めることに利用し、そうでないところは反発するか、読み飛ばす、これはテキストを読んでいることになってしまうのでしょうか。「読む」とはどういうことか、そのことについて哲学したいと思います。「この場はどのような場であるか、我々は何のためにここに集まっているか」については引き続き考察したいと思います。私たちはこれを考えるべき時期に来ていると思います。

佐野記